

所信表明

二〇二四年度中央事務局長選挙所信表明

中央事務局長候補

産業社会学部 三回生

野崎 朋香

この度、二〇二四年度中央事務局長に立候補致しました、産業社会学部三回生の野崎朋香と申します。はじめに、今回の立候補にあたり、御支援・御協力くださった皆様に心から感謝申し上げます。この所信表明では、これまでの私の学友会活動、そして、私が中央事務局長になった際に目指す中央事務局の活動方針について述べさせて頂きたいと思えます。長くなりますが、最後までお読みいただけますと幸いです。

【これまでの学友会活動】

私は一回生からこれまで、特別事業部として中央パート・学友会活動に関わってまいりました。財務部にも、調査企画部にも、学部自治会にも所属はしておりません。近年の中央事務局長は、

財務の仕事に精通していたこと、中央パートの複数の部署や団体に所属していたことなどがあり、中央パートに所属している皆様にとっては、特別事業部しか経験したことのない人間が、中央事務局長に立候補したことに対して、疑問を感じる方もいらっしゃるかと思います。そのため、まずは私がこれまで特別事業部として、どのような思いで、どのような活動をしてきたのかをお伝えしたいと思います。

前提として、特別事業部は、一〜四月までの新歓期と新歓期後（十二月の学園祭終了までの学祭期で、部署が変わります。新歓期は約十、学祭期は約十五の部署があります。本格的に学園祭の企画・運営に関わっていくのは二回生学祭期、企画の根幹を考える立場になるのが、三回生新歓期から、となります。です。ここで主はその時期についてお話させて頂きます。

三回生新歓期は、ウェルカムフェスティバルで例年実施されるサークルブース企画の担当をしておりました。活動内容といたしましては、ウェルカムフェスティバル当日の勧誘方法の管理、出展場所・出展数の選定から出展団体の募集、出展にあたってのガイドダンスの運営、ウェルカムフェスティバル当日におけるパトロールなどです。新型コロナウイルスによる行動制限が緩

和し始めた時期にあり、構内を練り歩いての勧誘解禁やパーティションの設置撤廃などのコロナ対策の緩和と、ウェルカムフェスティバル当日の勧誘規制を考えることに特に尽力いたしました。

サークルブース企画を通じて、誰かのために動きたいと考える私の信念が明確になったと考えています。コロナ対策の緩和については、単に緩和を押し進めたかったわけではなく、出展団体と新入生の両方が楽しめる新歓を作り上げることに重きをおいた取り組みでした。大学の新歓、と聞くときにぎやかなイメージを持たれる方が多いと思います。立命館大学でも、コロナ禍以前は、ビラ配りの花道が出来ていたと聞いています。そのような華やかな新歓を、勧誘をする団体さんにも、大学生活に期待を抱いて入学してくる新入生にも少しでも感じてもらいたい、その思いで、大学側との調整を行っていました。今年度のサークルブースでは、コロナ対策は消毒液の設置のみにとどめ、ブース数の拡大、パーティション設置・出展者の体温チェック表提出の撤廃、サークルブースの区画を超えての勧誘解禁を実現することができました。

ウェルカムフェスティバル当日の勧誘規制を考えることに関しては、スタッフパスの導入を行ったことが主な取り組みです。

コロナ禍以前は勧誘人数に制限がなく、誰が勧誘している学生なのか、勧誘が認められた団体なのかが分かりにくい状況にありました。また、コロナ禍での取り組みにおいては、勧誘人数を少数に制限し、結束バンドで目印を付けてもらいましたが、どの団体であるかの特定はできず、目印としても分かりにくいことが問題でした。今年度の新歓では、出展人数を拡大しつつも制限することで円滑な動線を確保し、スタッフパスを身につけてもらうことで、管理する側からも新入生側からも、出展団体・違反団体が簡単に見分けられるようになりました。これも、単なる緩和や動線確保の観点ではなく、全ての出展団体が当日平等に勧誘活動を行い、新入生に対しては、認められていない団体から勧誘を受けないための取り組みとして行ったものです。勿論、特別事業部も学生団体ですし、勧誘をする団体とは普段は平等な立場にあるので、団体の求める自由な勧誘を制限する特別事業部を良く思わない方も多数おられます。ウェルカムフェスティバルでのパトロールにおいても、通常的生活では到底経験し得ない厳しい視線を向けられます。しかし、全出展団体と新入生のためを考えての取り組みに私は誇りを持って向き合っていましたし、団体に対しても、こちらが上の立場にあると感じさせるのではなく、共により良い新歓運動を作り上げる

ことを伝えることを心掛けておりました。三回生新歓期は、私
が特別事業部だけではなく、より広い視野を持って、他団体や
他の中央パートとも関わり、全体を考えて物事を考える視点の
基盤となった時期になったと考えています。

三回生学祭期の話に移ります。現在私は、立命館大学学園祭の
公式キャラクターである、リッツ・ブラザーズに関連する企画
を担当しております(部署名としては「着ぐるみ」です)。この企
画は、昨年度の学園祭から立ち上げられたもので、二回生学祭
期から引き続いての担当になっています。

今年度、この企画を担当するにあたって、大切にしてきたこと
は、如何にリッツ・ブラザーズを多くの人に知ってもらい、如
何に人を笑顔にする企画を作るかです。昨年度から改革した点、
新しく行った(もしくははこれからの学園祭で行う)企画が多くご
ざいます。昨年度のリッツ・ブラザーズ企画では、リッツ・ブラ
ザーズ公式 Twitter の運用、衣笠祭典当日の写真会、グリーテ
ィングの運営が活動内容でした。つまり、企画としては衣笠祭
典だけで、リッツ・ブラザーズの着ぐるみを出す機会も、Twitter
投稿用の撮影と祭典当日の写真会とグリーティングのみでした。
OIC祭典・BKC祭典では、写真会は行われましたが、特別

事業部主体ではなく実行委員会の企画として実施され、私は当日の写真会運営のみに関わっておりました。昨年度の問題点として、リッツ・ブラザーズを学園祭公式キャラクターとして十分に宣伝できていない、SNSの投稿頻度も少なく、立命館大学の学生に対しても認知度をあげられていないことがあると考えていました。

このような昨年度の経験から、まずは、特別事業部が作るリッツ・ブラザーズ企画を三キャンパスに拡大しました。これにより、学園祭全体の広告塔であるリッツ・ブラザーズに関する企画をより充実し、統一感を持ったものにすることができ、また、特別事業部の他部署と検討する際に連携がとりやすいと考えております。つまり、企画の質をより上げることができるといふことです。

三キャンパスに企画を拡大し、取り組んだ主なこととしましては、着ぐるみを登場させる機会を増やすこと、情宣の強化、学園祭前後にも楽しめる企画を作ることです。

着ぐるみを登場させる機会を増やすことに関しては、開講期の昼休みに、学園祭を宣伝するクリアファイルやポケットティッシュ配布をする際に着ぐるみを登場させました。これにより、立命館大学の多くの学生にリッツ・ブラザーズを認知してもら

うことができた実感しています。また、学園祭当日の関しては、写真会を祭典の開始から終わりまで切ることなく開催し、各祭典のメインステージにも登場する機会を作りました。また、学園祭以外の地域イベントにも参加したり、学園祭当日の学園祭テレビにも出演したりと、出演依頼には積極的に参加して参りました。

情宣の強化については、まず、使用している学生が多いという観点から、Instagramを開設しました。Twitterは投稿頻度を上げ、リッツ・ブラザーズ企画に関することだけではなく、学園祭に関することや、リッツ・ブラザーズの日常も投稿内容に含めるようにしています。また、大学構内の学部ラウンジにリッツ・ブラザーズ企画について宣伝する卓上ポップを設置しております。

最後の、学園祭前後にも楽しめる企画に関しては、リッツ・ブラザーズのLINEスタンプを公募で集めたイラストや画像で作る企画を考えました。学園祭前から募集を始め、本所信表明を書いている時期には、LINEスタンプ第一弾の販売を行っております。LINEスタンプは学園祭の時期に関係なく、日常生活の中で使うことができるものです。学祭期以外にも、リッツ・ブラザーズを宣伝することができ、来年度以降の学園祭の発展に繋

がると考え、実施に至りました。

他にも多々ございますが、ここまで、今年度主に私が新しく取り組んできた企画について挙げて参りました。イメージがつきにくいかもしれませんが、様々新しいことに取り組んできたことと捉えていただければ十分です。これらは先述の通り、キャラクターを如何に多くの人に認知してもらうか、如何に人を笑顔にする企画を作ることができるか、を軸に企画してきました。人を笑顔にする企画を作ることとは、認知してもらおう際にも関わっています。多くの人が見るだけでかわいいと口にする着ぐるみの効果的な活用、参加型の企画など、企画への参加者が楽しむことのできる情宣を目標としてきました。

三キャンパスに拡大しての活動、新企画への挑戦は、どうしたらよいか分からないことや、各キャンパスの特別事業部のみならず、他の中央パートの方々に協力して頂いたことも多く、舵取りが大変な活動だと感じています。しかし、自らの持つ思いを忘れず、分からないことにも全力で向き合っていくことに対しては自信があります。まだ終わっていませんが、三回生学祭期は、新しいことに全力で挑戦し、企画を実現していく力を身につけていった時期になったと感じています。

ここまで、特別事業部としての活動について詳しくお伝えしてきました。私のこれまでの取り組みや活動に対する熱意を感じていただけたのではないかと思います。

【二〇二四年度に目指す中央事務局活動方針】

「これまでの学友会活動」を読んでいただければ、私がそれほど元々中央事務局全体の業務や課題点に明るくないことはお分かりかと思えます。しかし、この度の立候補にあたり、二〇二二年度以前の中央事務局のことや、二〇二二年度以降の中央事務局の基盤づくり、各部署の活動、中央事務局長の仕事等について学んできました。また、教学部との懇談会や中央委員会にも参加してきました。本来であればそれを踏まえて、来年度の活動方針を考え、それを主軸にこの章を書くべきなのだと思います。

しかしながら、それでは私の方針にはなりません。分からないことを分かったつもりで書きたくないと考えております。そのためまずは、私自身の活動方針を述べたうえで、来年度の私の考える中央事務局の活動方針をお伝えしたいと思います。

もし、来年度の中央事務局長に選んでいただけるのであれば、私は、これまで各部・室、中央パートを牽引してきた方々のお力を積極的に借りるつもりです。私は、中央事務局全体を一人で引っ張っていくような強いリーダーにはなりえないと自分で考えています。これまでの学友会活動から活かせることを活かし、全ての学友会員が生き生きとした学生生活を送る手助けをすること、各部・室とのコミュニケーションを大切にし、課題点を洗い出し、共によりよい中央事務局を作り上げることが私の活動の主軸としたいと考えております。

そして、中央常任委員との連携を密に取っていくことも大切するつもりです。中央常任委員会で決まったことを行う実務機関としてではなく、一人の学友会員として積極的に話し合い、中央事務局として出来ることを常に考えて全力で活動する所存です。

さて、ここから私の考える来年度の中央事務局の活動方針を述べさせていただきます。

前中央事務局長、現中央事務局長の施策を経て、現在の中央事務局は安定した組織基盤が作られてきました。そのため、二〇二四年度は、その基盤を引継ぎ、中央事務局の活動をより盤石

なものとすることを一つの目標としたいと考えております。そのうえで、学友会をより発展させていくための一步を学友会員と共に踏み出すことをもう一つの目標と致します。

私が中央事務局長になった際に目指す二〇二四年度の方針は、一・中央事務局内の連携強化、二・期待感を持った学友会活動へ、の二点です。これは、現在の私が実感を持って言えることとして挙げさせていただきたく存じます。

一・中央事務局内の連携強化

これまでの基盤作りの中で、私が不十分に感じたのが局内の情報共有不足です。中央事務局の各部署間の連携や円滑なコミュニケーションは現局長が中央事務局長に立候補した際にも掲げられていたものでした。しかしながら、まだ中央事務局内では、各部署間で上手く情報共有がされ、十分な連携やコミュニケーションが取られていないと感じません。二〇二四年度の中央事務局では、各部署間での連携・コミュニケーションをさらに確実なものにし、より安定した中央事務局を築いていきたいと考えています。

このように感じた理由の一つは、対外協力として参加した昨年のりつくり2022や今秋の秋新歓にあります。どちらにも言える

ことですが、協力している人は、主力として企画を運営している人と知り合いの人ばかりで、関わりの少ない特別事業部で参加している人はごく少数でした。私も企画していた方との個人的なつながりから興味を持ち参加しました。秋新歓には、春の新歓でサークルブースを担当していたことから、役立てることがあれば、という思いで参加いたしました。二つの企画に参加し、特別事業部のノウハウを活かせる場所がある、他部署も加わった方がより質の高い企画になると感じた部分があります。例えば、秋新歓では、当日の運営方法について説明を受けた際、備品の貸し出しの対応について事業部としての観点から助言することができました。各部・室が連携をすれば、より良い行事の企画・運営ができると確信しております。

また、学生会館オフィス207に来室する方への対応の難しさも理由の一つです。来室する方は特に、決算に関する質問やサークルに関する質問が多いため、特別事業部では対応できないことが多くあります。その際は、お問い合わせ用紙にご用件を記入していただきますが、それを担当者がいつ見るのかが不明であり、確実に担当者に伝わるかどうかも分かりません。各部署の活動内容等を把握しておくことで、解決できる内容であればその場で解決し、解決できない場合は、繋ぐ相手を理解し、事

前に疑問を深掘しておくこともできると考えます。

連携不足、情報共有不足の解決のための具体的な施策として、中央事務局研修の充実を掲げたいと考えております。今年度の中央事務局研修は、三部署の活動内容を大まかに把握しておくもので、一方的なものでした。また、実際の決算の質問に答えられるほどの詳細な内容ではなく、他部署・室との交流も行うことはできませんでした。

来年度の中央事務局研修では、各部長・室長と話し合いを重ね、研修方法、研修内容を見直し、より深い活動内容を中央事務局全体で把握できるようにしたいと考えています。

二．期待感を持った学友会活動へ

タイトルを見て、どういうことか、と疑問に思った方が大半かと思えます。分かりやすく言えば、楽しい学友会活動の手助けをしたいということです。

再度、特別事業部の話にはなっけてしまいましたが、現在共に活動をする仲間の中には、精神的に大きな負担を抱えながらも活動している人もいます。特別事業部のみならず、中央パートでは特に、自分が望まない作業に追われた生活をしている方がおられると感じています。私自身、三キャンパス共通企画の責任者

ということもあり、日頃から各キャンパスに出向いて活動しており、自分の自由な時間や正課に割ける時間は限られています。勿論、自らのやっていることに対して、楽しさ・誇りを感じている人も多いでしょう。しかし、自らの活動の目的を考え、もっと楽しさを感じながら活動することを大切にすべきではないでしょうか。

学友会員が期待感を持った学友会活動を実現するために、まずは中央事務局が期待感を持った活動をする必要があると考えています。中央事務局の各部・室の活動が何のため、誰のためのものなのかを局員自身が把握できているのかを確認し、把握できていないようであれば、それを明確にすることに取り組んでいきます。そうすることで、局員自身が目的を達成するために必要な手段・情報が自ずと見え、中央事務局内での活動をより洗練させることができると考えています。また、一つ目の方針とも関わる部分になりますが、中央事務局内での連携を局員に大切にしてもらいたいと思います。日頃からの中央事務局内の連携により、他部署や中央パート、課外自主活動団体が関わる際にも、スムーズに運営やサポートをすることができ、余裕を持った活動を実現できると考えます。

また、中央事務局で活動のブラッシュアップに取り組むことか

ら生まれる影響は、中央事務局内だけではなく、学友会全体へも還元されると考えます。中央事務局が自分自身で活動ビジョンと具体的にどのようなことを行っているかを明確に意識することで、サポートの幅や質をより高めていきたいです。そのことにより、課外自主活動団体だけでなく、団体に所属しない学生にも、中央事務局の活動内容や方針を理解してもらうことができ、団体や学生が積極的にサポートを求めることによって、期待感を持って学友会活動に参加してくださると考えています。

以上二点が、現在私が考える来年度の中央事務局活動方針です。パツとしない、と感じられたかもしれません。ですが、これまでに三年間中央事務局で活動し、他の学友会活動にも興味を持って取り組んでいくことのできる私なら、今後中央事務局長として活動していく中で、具体的にもっとやりたいこと、改善しなければならぬと感じることが出てくると思います。その際は、その課題に全力で取り組んで参ります。

【さいごに】

この所信表明は、特別事業部の超繁忙期ともいえる時期に作成

することとなりました。立候補を知っていて支えてくださった方だけではなく、立候補のことを知らずとも、苦楽を共にし、学園祭を作り上げてきた仲間がいたからこそ、ここまで辿り着くことができました。御協力・御支援頂いたすべての皆様に、改めて厚く御礼申し上げます。

今回私が立候補致しましたのは、きっかけとしては周囲からの推挙でしたが、これまでの安定した事務局の基盤づくりを引継ぎ、また、新たなステップへと発展させていくことを私に求められていると感じ、それに応えたい、そのうえで、支えてくれる周囲の仲間と共に、よりよい中央事務局、ひいては学友会を作っていきたいと考えたからです。

現時点で、私が学友会や中央事務局を十分に把握してないことは勿論理解しています。私よりも事務局に詳しい方々がいることも十二分に理解しています。知ったかぶりをするつもりは毛頭ありません。ですが、これからの一年をかけて学び続ける意志は誰より強いと思っていますし、私一人ではなく、それぞれの分野に精通した仲間の力を借りながら、共に中央事務局の運営をしていく所存です。

稚拙な表現ではありますが、「ワクワクを忘れずに」という言葉が、学友会活動に関わらず、これまでの学生生活や日常生活の

中で大事にしていることにあります。学園祭に関して言えば、自らの作業の手間や実績ではなく、如何に来場者が楽しめるのか、学園祭に来てもらうためにはどんな情宣をすればよいのか、学園祭が終わった後も楽しめる企画はないのか、来年以降も学園祭を盛り上げていくためにはどうしたらよいか、と常に企画を提供する相手の立場に立って考えることを大事にしてきました。また、これは自分自身への言い聞かせでもあります。たとえば自分がやりたかったことでも、そればかりやっていたは参っってしまうこともありますし、本来持っていた「ワクワク」を見失いそうになってしまうこともあります。それでは、参加者が楽しめるようなより良い企画はできません。心に余裕を持って、自分が「ワクワク」する、上手くいくと考えることを進めていくこと、自分への期待値を超えることを目標として、それに熱中すること、誰かのための「ワクワク」を忘れないこと。私は、これをこれからの学友会活動にも活かしていきたいと考えております。中央事務局のため、学友会のため、学友会員のためを考えて、活動に取り組み、誰もが期待感を持って活動できるような中央事務局を目指して活動していく所存です。大変長くなりましたが、最後までご覧頂きましてありがとうございます。ございました。

投開票日 二〇二三年一月二六日

二〇二三年度立命館大学学友会選挙管理委員会

同中央常任委員会